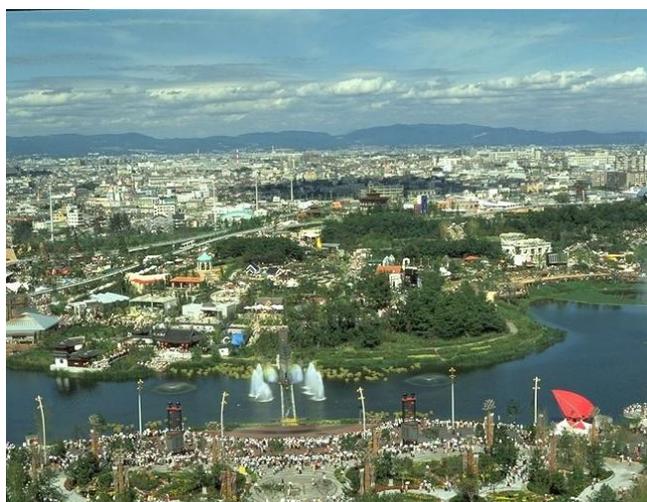


国際花と緑の博覧会の理念継承とまちづくり

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会
企画事業部長兼総務審議役 三谷彰一

1. はじめに

1990年（平成2年）、日本で4回目の国際博覧会で東洋初の大国際園芸博覧会（A1）であった「国際花と緑の博覧会」は、「自然と人間との共生」というテーマを掲げ、成功裡に終了した。当時は地域的な公害問題から世界的な環境問題に課題が移り、オゾン層の破壊や酸性雨による森林破壊等が台頭し、地球温暖化が危惧されはじめた時代である。当時、よく使われたフレーズが「都市化の進展により失われた緑の重要性を再認識する」であるが、これは、古くからの日本人の自然観が忘れられつつある時代において、多くは都市の住民である我々が、「自然」「いのち」に目を向けるものであった。この花の万博から33年が経過し、その理念継承と街づくりについて私見を述べてみたい。

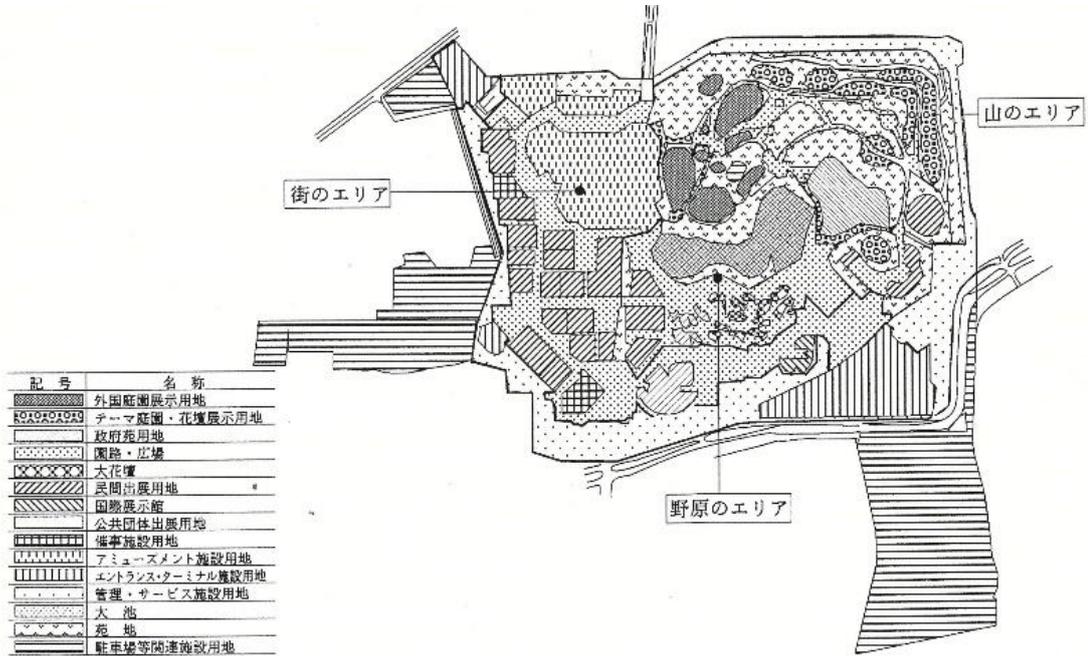


国際花と緑の博覧会会場

2. 理念の構築

国際花と緑の博覧会の「自然と人間との共生」というテーマは、基本構想及び基本構想を具現化した会場計画の基礎となっている。山紫水明の豊かな自然にあまたの神がいて、それを畏怖、畏敬する日本人の自然観を、欧州伝統の園芸博に融合させようとしたこのテーマは、19世紀半ばより国威発揚として時代の精華を展示してきた従来の国際博覧会とは趣を異とするもので、現在でも色あせない重要な理念である。余談であるが、「共生」という言葉は寄生・片利共生・相利共生という生物学用語であったが、総合プロデューサーの小松左京氏（作家）の提案により博覧会のテーマとなり、花の万博は、地球生命を象徴する「いのちの祭典」として位置付けられた。ちなみに、「共生」は、その後、省庁や自治体の施策、政治マニフェスト、大学の新学部名や不動産広告等の社会用語としても使われ、今では、まちづくりはもちろん、国、民族や文化をつなぐ言葉としても見受けられる。なお、「共生」のインターネット検索は2009年に2,590万件がヒット（筆者調べ）しており、成稿時の2023年2月には5,150万件である。

3. 会場計画



国際花の緑の博覧会ゾーニング

国際博覧会は、未来社会の実験の場であると言われる。1970年の日本万博においても「人類の進歩と調和」というテーマが表すとおり、当時の日本の右肩上がりの経済を象徴するものとして、動く歩道やテレビ電話など、今では実用化された夢の機器が話題となった。花の万博は、従来脇役であった「花と緑」を主役に、科学技術の精華は裏に隠すというもので、これは、前述の環境問題が台頭し、世紀末を前に多くの人々が忘れかけていた植物の役割、重要性を見つめなおし、自然と共生する近未来の都市像を考える機会となったものであった。

花の万博会場コンセプトは、21世紀にむけてより豊かで健康的な生活を支える花や緑のあり方をめざすものとして、日本の風土の基本的な空間構造を象徴する「山」と「街」を対の関係にあるエリアとした。さらに山と街を結ぶ広がりをも「野原」と定め、この三つを基本要素として

「山のエリア」「野原のエリア」「街のエリア」のゾーンが設けられた。まさにこれは、日本の里山・里地をイメージしたもの



山のエリア「沿道花壇」

であり、それぞれが重層的、連続的空間とされた。山のエリアでは木々の緑の中で2m幅の沿道花壇を楽しみ、野原のエリアではコンテナ花壇やボックス樹木を展望し、街のエリアでは一博覧会初めて、建蔽率を60%から50%に下げ、緑被率を30%（壁面緑化含む）にした。一パビリオン前の工夫を凝らした植栽やラティスや立体花壇に関心を集めた。

また、日本国政府が出展された「政府苑」においては、「都市・環境館」にて、未来都市が展示された。これは、都市における花と緑の役割、重要性を訴えるとともに、花と緑と人間が共存する都市環境のあり方についての新しい提言であった。今では散見される「窓辺やベランダの花かざり」「街のシンボリックツリー」「鳥が訪れる共生空間」「都市公園の生き物」などの他、ランドサットの視点により、都市全体の緑を展望し、様々な公園と動・植物園、緩衝緑地等のマスとしての緑が面と線のネットワークとして、都市の骨格、社会基盤として大切であるという展示がなされた。この展示には次の解説文が設置されていたので紹介する。



政府苑「都市・環境館」

『日本列島の緑は、先人たちが長い年月をかけて育んできたものです。この広大な自然の緑を保護し、有効に活用するための工夫が展開されています。良好な都市環境を創造していくためにも国土の緑が適正に保全されていくことが重要です。都市は、自然（緑）と対立するのではなく、調和することによって快適になるのです。』

4. 花の万博の成果（全国）

花の万博の成功、成果を踏まえて、会期中の平成2年9月6日に、建設大臣・農林水産大臣の諮問機関「国際花と緑の博覧会基本理念継承懇談会」が開催され、豊かな社会の創造に向けたまちづくり等に係る次の方策（要約）が提言された。

- ① 花と緑を取り込んだ豊かな空間の創出と保全に務める。
- ② 全国的な花と緑の国づくり・まちづくり運動を人々の参加により積極的に展開するため、ヨーロッパ諸国において実施されているコンクール方式による花と緑のまちづくり運動を導入する。
- ③ 全国都市緑化フェアや、みどりの日、みどりの週間等にちなんだ各種緑化行事の拡充をはかるとともに、全国規模のフラワーフェスティバル等を定期的で開催し、これらの内容も国際色豊かなものにする。

- ④ 「花の万博」で行われた花と緑のコンテストをこれらの催事に積極的に導入する。
- ⑤ テレビ、ラジオ等の有効利用で普及運動をより広範なものとする。「花の万博」の開催地である大阪については、全国的な花と緑のまちづくり運動の先進地にふさわしい、潤いのある快適な都市の整備を積極的に推進する。

それぞれの展開として、①は、都市緑化技術開発機構（現都市緑化機構）が設立され、都市空間や建物内外の緑化が研究、推進された。②は、全国規模の「全国花のまちづくりコンクール」が開催され、現在も大きな理念継承事業として開催されている（詳細は後掲）。③は、平成7年（1995年）の花フェスタ'95ぎふ、平成12年（2000年）の淡路花博（A2、B1）註1、平成16年（2004年）の浜名湖花博（A2、B1）註1などの開催。さらに本年、第40回を数える「都市緑化フェア」などがある。④はジャパンフラワーフェスティバルコンテスト（平成16年にて終了）が行われた。⑤は、地元大阪における様々な施策、事業が展開（詳細は後掲）されている。

また、参考として、花の万博後の1994年3月に国際花と緑の博覧会記念協会が国、地方自治体、花緑関係団体等の2,210件（回答数621件）に対しアンケートを行っているが、この回答内容から、花の万博の効果や意義の浸透が大きいことが伺える。設問「花の万博後の花・緑に関する普及効果：花の万博後の変化」については、62%が「変化があった」と回答し、その変化の内容（複数回答有）は、「花や緑のまちづくり推進組織の結成・花や緑の普及等に関する講演講習会の開催」47.5%であり、「新しいまちづくり運動、花緑の普及運動」「博覧会や展示会の開催」「新製品や新工法、生産流通システムの改善」「情報誌や機関誌の定期発行」等である。また、花や緑への関心が高まったが80%、環境の見直しや美化への意識が高まったが55%、地球環境への関心の高まりが26%となっており、「自然と人間との共生」という理念が共感を呼び、全国に波及し、環境意識を芽生えさせ新しい街づくりに寄与したと言えよう。

さて、全国的な国民参加の運動・コンクールである「全国花のまちづくりコンクール」（提唱：農林水産大臣、建設大臣（当時）、主催：全国花のまちづくりコンクール推進協議会（構成：当協会、日本花の会、都市緑化基金（現都市緑化機構）、日本花普及センター））であるが、花の万博の翌年の平成3年にスタートを切った。初年度は準備に手間取ったが、300件以上の応募を得、全国の花や緑を愛でる多くの人々を鼓舞し、街づくりにつながった。このコンクールは、花の美しさや花壇のデザイン等だけを競う



「NPO グランドワーク三島」2009年、2015～2018年花博記念協会助成採択団体、全国花のまちづくりコンクール2015年国土交通大臣賞受賞

ものではなく、ひとつの花壇が近隣に波及し、点から線に、線が面となっていくことが、審査のポイントであり、花を通じて人々が集い、地域社会を形成し、まちづくりに昇華することを目指している。幸いにして、1980年代後半から1990年代前半に一世を風靡した「トレンドドラマ (TVドラマ)」の登場人物が、花束を持ち、街を颯爽と歩くことで、男性が気恥ずかしく無く花を持つ風潮が生まれ、また1990年代後半にはガーデニングブームがあり (1997年には「ガーデニング」が流行語10選に選ばれた。)、応募総数は年を重ねるごとに増加した。ちなみに新型コロナウイルス感染症蔓延前は1,500件程度で推移していたが、感染症の影響下があった令和3年度にあっても1,000件 (註2) を数えた。本コンクールは、これまで32年の間、ほぼ全国の都道府県からの出品があり、延べエントリー数は約45,000件という膨大なもので、全国的に浸透し、定着している国民運動と言える。

なお、当協会の「助成事業」は平成16年度の公募以降、これまで450余の市民団体等を支援してきたが、このうち、まちづくり、花壇づくり等に関わる団体は110件で、本コンクールの下支えになっている。

さらに、当協会の復興活動支援助成事業は、東日本大震災を機に開始し、熊本大地震や西日本の激甚災害地域も対象とし、これまで132件の団体を支援した。地震で崩壊した街や津波でさらわれ何も無くなった土地は、モノクロの世界であり、その地に色を添える「花や緑」は、「いのち」や「希望」の象徴となり、明日を生きることにつながるという話も寄せられた。

また、仮設住宅や復興住宅に作られた花壇は、別々の場所から集まった人々のコミュニケーションの場となったとも聞いている。花や緑による街づくりは人づくりとも言われるが、その最たるものではないだろうか。



「ガーデンシティコープ金剛東すみれ会」
2007、2008年花博自然環境助成採択団体

5. 花の万博の成果 (大阪)

次に、花の万博が開催された地元大阪の施策であるが、まず、大阪市の取り組みとしては、博覧会閉幕直後の平成2年10月に「大阪市総合計画21」を策定され、同月29日に西尾市長 (当時) が、「大阪市花とみどりのまちづくり宣言」を行い、11月には100億円基金の「大阪市花と緑のまちづくり推進基金」設立している。

まちづくり宣言の趣旨は、花の万博は、都市の環境整備はもとより、文化や地域再生の問題など今後の新しい都市環境を創造していく上で、重要な示唆を含んだイベントであった。それは人々の生活の場や地域で、地球環境問題に対処する試みに通じるものとして今

後の都市・地域づくりに向けた 実験の場にもなった。大阪市では、花の万博を一過性に終わらせることなく、その理念と成果を今後のまちづくりに継承し、「花と緑のまちづくり」を大阪市の一つの文化として定着させていく、というものである。また、まちづくり推進基金は、住宅・事業所など民有地の緑化を含め、保存樹・保存林の保全・育成への助成、緑化の普及啓発事業など総合的に緑化を推進する、というものであり、博覧会閉幕間もない時期での宣言や基金規模 100 億円は、理念継承に臨む大阪市の強い姿勢が感じられる。翌年の平成 3 年 11 月には、緑化施策の中期計画として「グリーンナリー大阪・2005 計画」を策定された。これは「大阪市花と緑のまちづくり基金」の思想をよりいっそう進め、活用を促進するものであった。この後、平成 12 年には、緑とオープンスペースを保全・創出していくための長期的・総合的な計画「大阪市緑の基本計画」を策定し、平成 25 年には「新・大阪市緑の基本計画」として、「だれもが住みたい・働きたい・訪れたいと思う“みどりの都市”へ」を掲げ、緑のまちづくり施策を現在まで進化させている。

また、大阪府は、花博記念の森の設置や花の文化園の開設などを行うと共に、平成 21 年には、大阪府における緑づくりの推進施策の方向を明らかにした「みどりの大阪推進計画」を作成し、「みどりの風を感じる大都市 大阪」を将来像にかかげ、広域的な緑の保全・再生、ネットワークの形成、街中に多様な緑を創出するなどの基本戦略のもと、緑づくりの取り組みを推進している。さらに、平成 23 年には「みどりのまちづくり賞（愛称：大阪ランドスケープ賞）」（主催：当協会、大阪府、（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部）を創設し、計画の活性化を図っている。また、令和 3 年には、大阪府と大阪市において、大阪の広域的な公園緑地の魅力を高めていくための方向性を定めた「大阪パークビジョン」を策定すると共に、令和 4 年には「大阪のまちづくりグランドデザイン」を策定し、みどり施策を含んだまちづくりの戦略と方向性を整理している。

また、民間組織の「松下幸之助花の万博記念財団（現松下幸之助志財団）」や「大輪会」やは、花の万博への出展を機に設立または結成された団体であるが、閉幕後に解散することなく現在も、理念を引き継ぐための活動を続けられている。これは稀有で貴重なことと思われる。

6. 最後に

「国際花と緑の博覧会」の花の万博名誉総裁を務められた皇太子殿下（現天皇陛下）の開会式のお言葉、「花と緑に象徴される自然は、幾多の生命を育み、私たち人類もその恵みを受けて今日の繁栄を築いてきました。自然は生命の源であると同時に、私たちに感動と安らぎを与えてくれます。しかしながら、多くの国で都市化が進展し、また、地球的規模で緑が減少しつつある今日、自然のすばらしさ、大切さを再認識し、自然との調和と共生の道を求めることが人類にとって切実な課題となっています。このようなときにあたり、国際花と緑の博覧会が開催されることは、誠に時宜を得たものであると思います。この博覧会を訪れる人々が、世界中から寄せられた花と緑に触れることにより、自然の奥深

さを改めて知り、自然を畏敬する心をよみがえらせ、よりよい地球環境を次の世紀に引き継ぐことができるよう思いを深められることを期待いたします。」は、今もって深い洞察と思慮を感じる。

21世紀の望ましい都市の姿を探求しようとした花の万博、その理念が、様々な形で継承され、各地で息づいていることは、関係者としてとても喜ばしく、それは博覧会の準備や運営に携わった者が誇りに思うことである。

2027年、国内では37年ぶりに大国際園芸博覧会が横浜で開催される。博覧会の成否は、入場者数や参加国数だけではなく、後に何を残すかと言われるが、横浜国際園芸博覧会が、時代を映す舞台となり、かつエポックメイキングとして、その意義やねらいが日本全国に広がり、1990年の波紋と共に、潤いのある豊かな街づくりに寄与することを願っている。

(みたに しょういち)

註1：A1は「開催期間、3週間～6か月間の国際園芸博覧会」、A2は「同、3週間以内の国際園芸博覧会」、B1は「同、3週間～6か月間の国内園芸博覧会」。

註2：連携していた茨城県からの申請がなくなり、令和4年度は1,000件を下回った。

参照参考文献

- (財)国際花と緑の博覧会協会(1991) EXPO'90 国際花と緑の博覧会公式記録
- 建設省・農林水産省(1991) 国際花と緑の博覧会政府出展報告
- (財)大阪市公園協会(2001) 大阪市花とみどりの行政史
- 大阪市建設局花と緑の推進本部緑化推進部緑化課(1995年) グランドデザインとしての緑政策 グリーナリー大阪・2005計画
- (公財)日本花の会(2020) 花の友 149号～152号

写真

- p 1 国際花と緑の博覧会会場
- p 2 国際花の緑の博覧会ゾーニング
山のエリア「沿道花壇」
政府苑「都市・環境館」
- p 3 「NPO グランドワーク三島」2009年、2015～2018年花博記念協会助成採択団体、全国花のまちづくりコンクール 2015年国土交通大臣賞受賞
- p 4 「ガーデンシティコープ金剛東すみれ会」2007、2008年花博自然環境助成採択団体